

# 社会思想:再生産の経済思想—リカードの経済学—

岡 敏弘

1999年10月28日、11月4日

## 目次

1 『原理』前史	1
1.1 穀物論争	2
1.2 リカード経済学の位置と課題	2
2 労働価値説	3
3 労働価値説に基づいた分配理論	4
3.1 賃金	4
3.2 利潤	4
3.3 地代	5
4 リカードの価値と分配の理論の一般的定式化	5
5 分配の動学	6
6 原理に基づいた政策論	7
6.1 外国貿易の利益	7
6.1.1 貿易が利潤に与える影響	7
6.1.2 比較生産費説	8
6.2 租税論	9
7 リカードと現代経済学	10

## 1 『原理』前史

デイビッド・リカードは1772年、ロンドン、リバプール・ストリート駅近くで、ユダヤ系大家族の第3子として生まれた。父エイブラハムは、オランダ生まれ、ロンドン証券取引所の証券仲買人であった。デイビッドも14歳で証券仲買人となったが、1799年に、アダム・スミスの『国富論』を読んで経済学に興味を持った。1817年に主著『経済学および課税の原理』を出版。1919年には下院議員となり、1823年没<sup>1</sup>。

<sup>1</sup>菱山泉(1979)『リカード』10ページ。

## 1.1 穀物論争

イギリスでは、1688年(名誉革命)以来、穀物の輸入は関税によって事実上禁止され、輸出は奨励金交付によって促進されていた。18世紀中葉以降、産業革命による急速な人口増加によって、イギリスは穀物輸入国に変化した。既得の農業権益の保護によって穀物価格は上昇傾向にあった。輸出奨励金は1773年に軽減され、1814年には廃止されたが、1804年の新しい穀物条例では、小麦の国内価格が1クォータあたり63シリングに上昇するまでは輸入が禁止されていた。

1815年、小麦価格は60シリングに上昇した。63シリングになれば、海外から安い穀物が輸入されるかもしれない。そこで、地主と借地農の関心は、輸入価格を引き上げることにあった。輸入価格を80シリングに引き上げる穀物条例案をめぐる、論争が燃え上がった。

リカードは、1815年2月24日『穀物の低価格が資本の利潤におよぼす影響についての試論』を出版し、マルサスに対する論駁の形をとりながら、

穀物の輸入価格引き上げを策する地主階級に対して、穀物の自由貿易による穀価の低下が利潤率を高め、資本蓄積を促進することによって地主を除く社会階級一般に有益である所以を論証<sup>2</sup>

し、同時に

資本間の競争によって利潤率の低下傾向を説くスミスの学説の離脱<sup>3</sup>

を図った。

マルサスの立場は、

- 農業と工業との適当なバランスがあること
- 穀物の輸入を介する自国と海外との相互依存関係が戦争によって破綻する危険性をもつこと
- 政治や経済は「特性と幸福」を得るための手段にすぎず、そうした目的にとって、農業と工業との黄金分割が存在すること

を強調するものであった。

これに対して、リカードは、工業化を軸にした資本主義化こそ、イギリスの国益に適合すると信じたのである。

穀物条例は1815年に下院を通過、成立したが、1827年に穀物関税のスライド制が導入され、1846年に撤廃された。

## 1.2 リカード経済学の位置と課題

リカードは、スミスから「価値の理論」という経済学の重要な原理を受け継ぎ、それを徹底・純化し、それによって逆にスミスの諸命題を批判した。そのことによって、彼は古典派経済学の確立者となったのである。リカードのスミス批判の意義は、個人がどんなにあがいても貫徹する経済の客観的法則を提示するという点にある。スミスの命題には、個人の行動の直接的結果から類推されるものを経済全体の結果であると見なすものがある。そのいくつかは誤りであり、経済の客観的法則を適用すれば逆の結果になるということをリカードは示したのである。

リカードがスミスから受け継いだ「価値の理論」は「労働価値説」である。これを最大限に駆使して、彼は、自分が考える経済学の課題である、「大地の生産物の諸階級への分配に関する法則」を解明した。リカードの時代の諸階級とは、

<sup>2</sup>同上、19ページ

<sup>3</sup>同上、20ページ

1. 労働を提供して賃金を得る労働者階級
2. 資本を提供して利潤を得る資本家階級
3. 土地を提供して地代を得る地主階級

の3階級である。国の生産物がこれらの階級間にどのように分配されるかが、経済学が解明すべき中心問題だとリカードは考えたのである。

## 2 労働価値説

さて、リカードがスミスから受け継いだ「労働価値説」とは次のようなものである。リカードに倣って、アダム・スミスから引用しよう。スミスは次のように述べた(リカード『経済学および課税の原理(上巻)』岩波文庫、17ページ)。

「価値という言葉には、2つの異なる意味がある。それは、ある時はある特定の物の効用を表現し、またある時はこの物の所有がもたらす他の財貨の購買力を表現する。一方を使用価値、他方を交換価値と呼ぶことができる。」

「最大の使用価値をもつ物が、交換価値をほとんど、または全くもたないことがしばしばある。これに反して、最大の交換価値をもつ物が、使用価値をほとんど、または全くもたないことがしばしばある。」

例えば、水や空気は大いに有用だが、交換価値はほとんどもたない。金は、ほとんど有用性をもたないが、他の財貨の多量と交換される。

したがって、効用(使用価値)は交換価値の尺度ではない(効用は交換価値があるための必要条件ではあるが)。

リカードは交換価値の源泉は2つあると言う。

1. 稀少性—珍しい彫刻や絵画、稀覯の書や鑄貨、特別の土地からとれた葡萄から作られた葡萄酒。これらの物の価値はそれを作るために最初に投下された労働量から無関係であり、それを所有したいと欲している人々の富と嗜好とに依存する。(リカード前掲書上巻18ページ)
2. その獲得に要する労働量

そして、欲求の対象となっている財貨の大部分は、労働によって取得され、したがって、その交換価値は、稀少性ではなく、その生産に投下された労働量によって決まる。この命題が労働価値説である。スミスは次のように言う。

「あらゆる物の真の価格、すなわちあらゆる物がそれを取得したがっている人に真に費やさせる物は、それを獲得する際の苦勞と手数とである。あらゆる物が、それをすでに取得していて、それを処分、つまりそれをなにか別の物と交換したいと思っている人にとって、真にどれほどの値打ちがあるのかといえば、それによって彼自身が節約することができ、他の人々に負わせることができる苦勞と手数とである。」

「資本の蓄積にも土地の専有にも先立つ社会の初期未開の状態においては、さまざまな物の取得に必要な労働量の間比率が、それらの物を相互に交換することに対して、なんらかの法則を与えうる唯一の事情であるようである。例えば、狩猟民族の間では、一頭のビーバーを仕止めるのに費やされる労働が、通常は、一頭の鹿を仕止めるのに費やされる労働の二倍だとすれば、一頭のビーバーは、当然二頭の鹿と交換されることになる。...」(リカード前掲書上巻19～20ページ)

「商品に実現される労働量がその交換価値を規定するのだとすれば、労働量の増加は必ずその労働が加えられた商品の価値を上昇させるにちがいないし、同様に、その減少は必ずその価値を低下させるにちがいない。」(前掲書上巻20ページ)

ところが、スミスはこれとは別の価値標準をたてた。つまり、彼は、物の価値は、「それと交換される労働量」あるいは「それが市場で支配する労働量」によっても決まると言ったのである。ここにスミスの混乱があるとリカードは指摘した。

例えば、1本の鉛筆の価格が100円であるとしよう。労働の賃金が1時間1000円であるとする、鉛筆1本は市場で0.1時間の労働を支配する。しかし、これは1本の鉛筆の生産において投下された労働量とは異なる。投下労働量は通常0.1時間よりも小さい。

もう1つのスミスの問題点は、彼が価値に関するこの学説の適用を「初期未開の状態」に限定したことであるとリカードは言う。リカードは、労働価値説は、資本蓄積が進んだ社会の発展段階にも、土地が専有された段階にも適用できると見なした。資本蓄積が進んだ社会の発展段階というのは、労働だけでなく、他のさまざまな材料や器具や機械が、生産のために不可欠であるような状態を指す。今日の経済ではそれは常識であるが、リカードの時代においても、資本主義的な生産が一般的となり、労働以外の生産手段の使用は当たり前のことであった。

労働と並んで使用される材料や器具や機械もまた、財貨の価値に貢献する。それは、それらの材料や器具や機械の生産において投下された労働の量に応じてである、という形で、労働以外の生産手段の存在は、労働価値説に取り込むことができる。

鉛筆を例にとると、それは芯とそのまわりの木材とから作られる。芯の原料は黒鉛と粘土である。木材は薄い板材として鉛筆工場に入る。その黒鉛の生産(採掘・輸送など)において直接間接に投下された労働の量が0.01時間、同じく粘土に投下された労働が0.01時間、板材の生産(伐採・製材・輸送)に投下された労働が0.01時間、それらを鉛筆に加工する(黒鉛と粘土とを混ぜて焼き固めて芯の形に整形し、それを板にはさんで切断し鉛筆の形にする)ための機械設備を生産するために投下された労働量の償却分が0.02時間であり、燃料など他の投入物の生産において投下された労働が0.01時間であり、それらすべての工程で鉛筆製造に直接携わる労働の量が鉛筆1本あたり、0.02時間であるとする、鉛筆の生産において直接間接に投下されている労働の量は0.08時間であると言ってよい。そして、労働価値説は、鉛筆の交換価値はこの労働量に比例して決まるといふ説だと言えばよい。

こうして、労働以外の生産手段が使われている場合でも、労働価値説は妥当するとリカードは言うのである。

### 3 労働価値説に基づいた分配理論

さて、この価値の理論に基づいて、分配を支配する法則をリカードはどのように解明していくのか。

#### 3.1 賃金

労働者階級への分配を決めるのは賃金の大きさである。これに関しては、リカードの説は、労働者の生存と再生産を可能にするために必要な生活物資の価値に等しくなるように賃金は決まるといふものである(生存賃金)。

#### 3.2 利潤

資本家階級の所得である利潤は、生産物の価値から、労働の賃金と他の生産手段の価値とを差し引いた残りとして決まる。これがリカードの利潤の理論である。

### 3.3 地代

地主階級の所得である地代は、土地生産物の生産(主に農業)からのみ生じる。地代発生メカニズムは、リカードによれば以下のとおりである。

生産力のさまざまに異なった土地が存在し、非常に肥沃な土地は稀少である。最も肥沃な土地だけではその国の全人口を養う食糧(以下、穀物でそれを代表させよう)をまかなうのに十分ではないとき、肥沃さの劣った土地も耕作されざるを得ない。肥沃さの劣った土地での生産では、同じ量の穀物を生産するのに、より多くの労働の投入が必要であろう。そして、穀物の価値は、最も劣った生産方法での投下労働量によって決まるであろう。なぜなら、それよりも小さい価値だと、その劣った方法は欠損を生じ、行われぬだろうからである。

そうすると、劣った土地と併存している優等地で生産される穀物は、その生産に投下されている労働量によってきまる価値を超える交換価値を市場において受け取ることになる(どの穀物の市場での価値が同じだとすれば)。したがって、優等地での生産は超過利潤を生む。しかし、そのことが知れ渡ると、この超過利潤を生む土地に資本が殺到するであろう。この資本間の競争は、超過利潤を消滅させるべく、地主に支払われる地代を発生させるのである。

穀物に対する需要がもっと大きくなれば、もっと劣った土地でも耕作が行われるようになり、穀物価格はもっと上昇する。その結果、先ほどの劣った土地さえも、今度の最劣等地よりは肥沃な土地ということになり、その土地にも地代が発生する(最劣等地での投下労働量に比例して穀物価格が決まるのであるから)。そして、最優等地の地代は上昇する。

これがリカードの地代理論(差額地代論)である。

アダム・スミスの地代に関する考えはこれとは違っていた。スミスは、農業では、自然(役畜など)が人間と並んで労働をし、それが人間の労働と同様に価値を生み出すがゆえに、地代が生じると考えた。リカードの地代論では、自然の貢献が小さくなる(肥沃土の劣った土地が生産に引き入れられる)がゆえに地代が発生するのであり、自然の生産力が小さくなればなるほど地代が大きくなるのである。

## 4 リカードの価値と分配の理論の一般的定式化

以上の価値と分配の理論を用いて、リカードは分配の動学を展開する。分配の動学とは、社会が発展するにつれて、3階級への分配がどう変化するかということである。それを理解するためには、上で述べた価値と分配の理論に一般的な形式的表現を与えておくことが助けになる。

経済が工業部門と農業部門とからなると仮定しよう。工業部門を第1部門、農業部門を第2部門とする。そして以下のように記号を定義する。

$v_1$  : 工業生産物1単位の価値

$a_1$  : 工業生産物1単位の生産に投入される生産手段(工業生産物とする)の量

$l_1$  : 工業生産物1単位の生産に直接投下される労働の量

$v_2$  : 農業生産物(穀物)1単位の価値

$a_2$  : 農業生産物1単位の生産に投入される生産手段(工業生産物とする)の量

$l_2$  : 農業生産物1単位の生産に直接投下される労働の量

$b$  : 労働1単位の生存と再生産に必要な穀物の量

$\pi_1$  : 工業部門の利潤

$\pi_2$  : 農業部門の利潤

このとき、次の式が成り立つ。これは、労働価値説における価値の定義式である。

$$v_1 a_1 + l_1 = v_1$$

$$v_1 a_2 + l_2 = v_2$$

また、利潤は次の式を満たすように決まる。

$$v_1 a_1 + v_2 b l_1 + \pi_1 = v_1 \quad (1)$$

$$v_1 a_2 + v_2 b l_2 + \pi_2 = v_2 \quad (2)$$

この段階ではまだ地代は発生していない。穀物需要が高まって、従来の土地だけではその需要を賄えなくなると、劣った土地が生産に引き入れられる。劣った土地での農業生産に関する諸係数を次のように定義しよう。

$a'_2$  : 劣った土地での農業生産物1単位の生産に投入される生産手段(工業生産物)の量

$l'_2$  : 劣った土地での農業生産物1単位の生産に直接投下される労働の量

この土地が生産に参入することによって、地代が発生し、穀物価値と利潤とが変化する。そこで、このときの穀物価値を  $v'_2$ 、地代を  $t$ 、工業利潤、農業利潤をそれぞれ  $\pi'_1$ 、 $\pi'_2$ 、とすると、この劣った土地が参入した状態での価値の定義式は

$$v_1 a_1 + l_1 = v_1 \quad (3)$$

$$v_1 a_2 + l_2 + t = v'_2 \quad (4)$$

$$v_1 a'_2 + l'_2 = v'_2 \quad (5)$$

$$(6)$$

となる。ここで、

$$v_2 < v'_2 \quad (7)$$

$$t = v'_2 - v_2 \quad (8)$$

が成り立つ。利潤は次の式を満たさなければならない。

$$v_1 a_1 + v'_2 b l_1 + \pi'_1 = v_1 \quad (9)$$

$$v_1 a_2 + v'_2 b l_2 + \pi'_2 + t = v'_2 \quad (10)$$

$$v_1 a'_2 + v'_2 b l'_2 + \pi'_2 = v'_2 \quad (11)$$

## 5 分配の動学

(7) から (1) と (9) とを比べると、明らかに

$$\pi'_1 < \pi_1$$

である。また、(8) を (10) に代入すると、

$$v_1 a_2 + v'_2 b l_2 + \pi'_2 = v_2$$

を得るが、これを(2)と比較し、(7)を考慮すると、

$$\pi'_2 < \pi_2$$

となることがわかる。

ここから、リカードは次のような動学的命題を引き出した。つまり、社会が発展し、資本が蓄積されるにつれて、どの部門においても利潤は低下するというのがそれである。その理由は上の式で明解に示されているが、言葉で説明すると以下のとおりとなる。資本が蓄積され、人口が増えると、穀物需要が増える。それは耕作限界の拡大をもたらす。つまり、肥沃さの劣った土地が生産に引き入れられる。それは穀物の価値の騰貴をもたらす、それが優等地での地代を生む。穀物価値の上昇は、賃金を上昇させ、利潤を低下させる。

リカードの理論体系では、利潤は賃金が増えるときにだけ低下する。

アダム・スミスの考えはそうではなかった。彼もまた、資本蓄積につれて利潤が低下すると言った。しかしその理由はリカードとは異なっていた。スミスは次のように言う。

「資本の増加は、利潤を低下させる傾向がある。多数の富裕な商人の資本が同一の事業に向けられる場合には、彼ら相互の競争が自然にその事業の利潤を低下させる傾向がある。そして、同一の社会で営まれるさまざまな事業全部で同様に資本が増加する場合には、同じ競争が全事業で同一の効果を生ずるにちがいない。」(リカード前掲書下巻110ページ)

つまり、スミスは資本が増加するときに利潤が低下する原因を資本間の競争に求めている。リカードは、これに対して、競争が行き着いた先の状態を決める別の根拠を追求したのである。その根拠が先の分配理論であり、それに従うと、賃金上昇以外に利潤を低下させる原因はなく、そして、賃金を上昇させる原因は、穀物価値の上昇以外にないのである。

ともかく、リカードの理論によれば、こうして資本蓄積は利潤の低下をもたらす。しかし、利潤が存在する限り、資本は成長していく。そして成長する限り利潤は低下し続ける。したがって、その過程は利潤がゼロになるまで続く。利潤がゼロになったとき、資本蓄積は止まり、人口も定常状態に達する。このとき、利潤はゼロ、賃金は相変わらず生存水準で、地代は最大になっている。これがリカードの描く分配の動学である。

## 6 原理に基づいた政策論

### 6.1 外国貿易の利益

#### 6.1.1 貿易が利潤に与える影響

上で見たように、リカードの理論体系によると、利潤の長期低落傾向が導かれる。リカードは、これを緩和する役割を外国貿易に期待した。

アダム・スミスもまた、外国貿易が利潤率を高めると言ったが、その理由はリカードとは異なっていた。スミスは、貿易商人の得る高い利潤率が、国内の他の産業から資本を引きつけ、他の分野で資本が稀少になることによって、利潤率が高まると考えた。

しかし、リカードの理論体系からすると、利潤を高めるものは賃金の低下しかない。そこで、外国貿易が利潤率を高めるとしても、それは賃金が増える限りにおいてである。外国貿易が賃金を低下させるとしたら、それは、外国貿易によって安い穀物が輸入されることによってである。

リカードは外国からの安い穀物が賃金を低下させ、それが、地主に有利な分配の変化を防ぐことを期待して、穀物法の廃止を主張したのである。

### 6.1.2 比較生産費説

毛織物とぶどう酒という2つの産業の投下労働が次のようになっているとする。

	毛織物	ぶどう酒
イギリス	100人/年	120人/年
ポルトガル	90人/年	80人/年

このとき、このとき、資本と労働の国境を越えた移動が困難で、生産物だけが国境を越えて移動するとすると、毛織物もぶどう酒もポルトガルの方が生産性が高いにもかかわらず、自由貿易の結果、イギリスは毛織物の生産に特化し、ポルトガルはぶどう酒の生産に特化する。そして、それは両国に利益をもたらす。これが比較生産費説である。

国際貿易があるとき、両国がそれぞれの生産物に特化する理由は以下のとおりである。労働価値説によれば、イギリスでの毛織物のぶどう酒に対する国内相対価格は10/12であり、ポルトガルでの毛織物のぶどう酒に対する相対価格は9/8である。このとき、ポルトガルでつくられたぶどう酒1単位をイギリスにもっていけば、12/10単位の毛織物と交換できる。これをポルトガルにもって行ってぶどう酒と交換すれば、27/20単位のぶどう酒を得られる。つまり、貿易によって1単位のぶどう酒が27/20単位に増えるのである。こうして、貿易は貿易商人に利益をもたらす。

さて、毛織物のぶどう酒に対する相対価格(交換比率)が、イギリスで10/12、ポルトガルで9/8のときには、上で見たように、貿易商人は1単位のぶどう酒からぶどう酒7/20単位分の利潤を得る。イギリスでの相対価格がもう少し上がり、ポルトガルでの相対価格がもう少し下がっても、ぶどう酒1単位あたり正の利潤があるだろう。そして、そうすることによって、イギリスから輸入した毛織物を、ポルトガル国内で、もとの相対価格9/8よりも安く販売できる。そうすると、販売量を増やし、総利潤を増やすことができるだろう。商人利潤を求める商人たちの競争は、国際相対価格がイギリスとポルトガルとで均等になるまで続くであろう。

こうして、国際相対価格が、10/12と9/8との間のある値、例えば1に落ち着くと、ポルトガルでの毛織物生産はイギリスからの輸入品によって駆逐されてしまう。相対価格が1ではポルトガルの毛織物生産は赤字になるからである。同様に、イギリスのぶどう酒生産も、ポルトガルからの輸入品によって駆逐される。

さて、このような生産の特化をともなう貿易は両国に利益をもたらす。その理由は以下のとおりである。

両国の利用可能な労働の量が1000人/年であるとしよう。1年間に生産される毛織物の量を $x$ 、ぶどう酒の量を $y$ とすると、貿易がないとき、イギリスで消費可能な毛織物とぶどう酒との組み合わせは

$$100x + 120y = 1000$$

を満たす $x$ と $y$ との組によって与えられる。ポルトガルでのそれは、

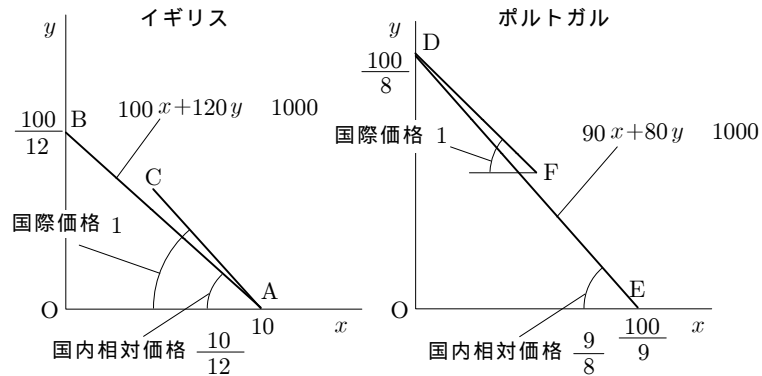
$$90x + 80y = 1000$$

を満たす $x$ と $y$ との組によって与えられる。それは図1のそれぞれ直線ABおよびDEとその下側の領域によって示される。

これらの直線(ABおよびDE)の傾きは、両国での国内相対価格を示している。ポルトガルがぶどう酒の生産に特化し、毛織物を輸入するということは、100/8単位のぶどう酒を国内で生産(点Dで示される)し、そのうちいくらかを国際交換比率1で毛織物と交換することを意味する。その交換は直線DFに沿った移動によって示される。したがって、ポルトガルは、ぶどう酒の生産に特化し、毛織物を輸入することによって、消費可能な両商品の組み合わせの集合を、国内生産だけのとき(ODE)よりも広げることができるのである。イギリスも同様に、毛織物に特化することによって消費可能な両商品の組の集合をOABから外へ広げることができる。



図 1: 比較優位の原理と貿易の利益



## 6.2 租税論

リカードの原理に基づいた租税論は次のようにまとめることができる。

1. 生産物に対する課税は、消費者一般によって負担される。と同時に、それは賃金を引き上げることによって利潤を減らすので、資本家によっても負担される。
2. 地代に対する課税は地主によって負担される。
3. 賃金に対する課税は、利潤を減らすことを通じて、資本家によって負担される。

アダム・スミスは

1. 土地の生産物に対する租税は、結局は地主が支払う。
2. 賃金に対する租税も、地代からの控除という形で地主の負担になる。

と考えた。しかし、これは誤りであることがわかる。

土地の生産物の価値 1 に対して  $s$  の率で税がかけられたとすると、価値の式 (3) ~ (4) は

$$v_1 a_1 + l_1 = v_1 \quad (12)$$

$$(1 + s)(v_1 a_2 + l_2 + t') = v_2'' \quad (13)$$

$$(1 + s)(v_1 a_2' + l_2') = v_2'' \quad (14)$$

$$(15)$$

となるであろう。 $v_1$  には変化がないから、(5) と (14) とを比べると、 $v_2' > v_2''$  であり、

$$v_2'' = (1 + s)v_2' \quad (16)$$

であることがわかる。これを (13) に代入すると、

$$(1 + s)(v_1 a_2 + l_2 + t') = (1 + s)v_2'$$

すなわち、

$$(v_1 a_2 + l_2 + t') = v_2'$$

これを(4)と比較すると、

$$t' = t$$

つまり、地代は変わらないのである。したがって、土地生産物の対する税を地主が負担することはない。それではだれが負担するかというと、課税によって  $v_2'$  が  $v_2''$  に上がるのであるから、(9)~(11) から、利潤  $\pi_1, \pi_2$  が減少するしかないことがわかる。したがって、税を負担するのは資本家なのである。

同様に、賃金に対する課税も、資本家が負担することになるのである。

## 7 リカードと現代経済学

リカード価値論の特徴は

- 生産費によって価値が決まる。
- 需要の側の要因は価値決定に参画しない。需要は数量を決める。
- 分配は価値から独立である。
- 製造業における収穫一定と土地生産における収穫逓減。

その後の、マーシャル、ワルラス、メンガーらの経済学は、収穫逓減法則を全分野に適用するものであった。製造業における生産に拡張したのみならず、消費の分野にも拡張したのである。すなわち、限界生産力減少、限界効用減少を仮定することによって、需要側の要因も価値決定に参画できるような理論を作り、需要と供給との均衡による価値と数量との同時決定の体系を作り上げたのである。彼らの体系では、分配も、生産要素の価格決定メカニズムを通じて、価値と同時に決定される。

ところが、生産における収穫逓減は一般的に観察される事実に反する。現実には大工業において、巨大な固定設備の存在により収穫逓増が一般的であり、平均費用逓減下で生産が行われているのである。ピエロ・スラッフアが1925年にこの問題を提起し、それが、ジョン・ロビンソンの不完全競争論を生み、その後の寡占論を生んだ。スラッフア自身は、1960年に『商品による商品の生産』を著し、リカード経済学のエッセンスを数学的に表現した。ここから、反新古典派経済学の諸理論が生まれた。